

浄土

monthly JODO

2017 October

10

法然上人讃仰会

貧乏董

三宅政吉

グラフィック・デザイナー



いずれも縦 184 ミリ。1 寸は 30.303 ミリであるから正確には 181.814 ミリである。メートル法が法的に完全施行されたのは 1966 年であるから、それ以前の商品だろう。左は買わなかったが、写真撮影を許可してもらった箱である

雲形定規は今でも使われているのだろうか。職業柄、画材屋やデザイン用品店にはときどき出かける。たしかに雲形定規は売ってはいるのだが、この不思議な道具を使う人が今いるとは到底思えない。

わたしも昔はプラスチック製のものを持っていたし、自由曲線を描くさいには（使い方はなかなか難しいのだが）使ったりはしていた。ところがデザイナーの作業にコンピュータが使われるようになって以後、雲形定規を使う人はほとんどいなくなったはずだ。ベジェ曲線で、自然で滑らかな自由曲線を描くことができるようになったからである。

フリーハンドで引いた曲線に雲形定規を当て、いちばん目的にあった曲線を選びながら、滑らかな線を描くというめんどうな作業から、デザイナーや設計者、製図家は解放されたわけである。

写真の木製の雲形定規は、東京・代々木の樺通りの骨董市で見つけたものである。十二枚セットで七枚が残っていた。露店の店主に値段を聞くと「一枚八百円」という。けっこう高いものである。店主は「残り全部を買ってくれるのだったら、箱も付けて一枚七百元にしろくよ」と言う。七枚だと四千九百元である。それはいくらなんでも無駄遣いというものだろう。

手にとって見てみると、小さく「ズ」と焼印が押されている。「これは何？ ニューヨーク製なの」と店主に尋ねる。「いや、前の持ち主のイニシャル」とのことである。箱をみると日本製であることがわかる。「12枚6寸」とラベルが貼ってある。まだ尺貫法が使われていたころのものか。

大事に使われたようで、傷や汚れはない。形の面白いものを三枚選んで買った。

後日、若いデザイナーにこの三枚の雲形定規を見せ「おもしろいでしょ」と聞くと、彼はキョトンとした顔で、「それ、なんすか」と言う。そうか、デザインを勉強し始めたときからコンピュータを使っていた若者には、まるで縁のない代物なのである。わたしも実際に使うわけではない。ときどき手にとってデザイナーを学び始めたころのことを思い出すだけである。

浄土

2017/10月号 目次

連載	私の好きなご法語	鷹司誓玉	2
連載	法然上人と親鸞聖人(十四)	林田康順	4
連載小説	渡辺海旭⑧1	前田和男	10
連載	響流十方	林田康順	18
連載	江戸の川を歩く⑮	森 清鑑	22
連載	マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう	29
連載	誌上句会	選者＝無縫庵烏鷺坊	30
編集後記			32



表紙題字＝中村康隆元浄土門主
表紙写真＝鬼海弘雄
アートディレクション＝近藤十四郎
協力＝迦陵頻伽舎

善人は善人ながら念仏し
悪人は悪人ながら念仏して
ただ生まれつきのままにて念仏する人を
念仏にすけささぬとは言うなり

私は昭和三十年三月下旬、善光寺百十九世大宮智栄上人の附弟として得度入門させて頂き、約二週間程のちに京都尼衆学校の後期に入学し、出家或いは寺院生活のなんたるかも全く知らぬまま尼僧としての第一歩を踏み出しました。

当時尼衆校は文部省の管轄ではない特殊学校でありまして、教科内容も日々の生活規範も、それまで経験してきた一般の学校生活とは全く異なり、先生方のお考えも生活形態（行持）も一つ一つ驚くことばかりでありました。

直接の指導者としてはお二人の尼僧様が居りましたが、ことに監事の寺森教山先生は持戒堅固な常念仏者でいられました。普通の会話をしているても、少しでも途切れると即座に「南無阿弥陀仏……」と低声念仏が聞こえてきました。

私は普通の一般家庭に育ち（家系としてはむしろ神道でした）でしたが、たまたま大伯

母が善光寺に入られた一条智光上人であつた姻戚関係によつて、入門することになり、尼衆校という新しい環境に入つて、内心驚きと不安を感じるばかりでありました。

寺森先生は自ら厳しくご自身を律し、学生たちにもなかなか厳格で、少し風邪気味とか頭痛がするという人があれば、「お念仏がたらんのや!」と叱られました。口では厳しく言われながらも、信者さん方にも相談し、お医者さんにも受診させたり、また自ら野草を摘んで煎じて飲ませたり、或いは膏薬や湿布薬を作つて患部に貼つたり塗つたりして下さる、心優しい教育者でありました。

尼僧生活の第一歩からこの師尼に会い、初步的心得から教えて頂けた私は誠に仕合わせでありました。

最初に記した宗祖上人御法語に「善人は善人ながら念仏し、悪人は悪人ながら念仏して、唯生まれつきのままにて念仏する人を、念仏にすけさぬとは言ふなり」とあつて、智慧・持戒・忍辱・道心や慈悲をもすけ（助業）としなくとも、念仏さえ申せば、往生に何の障りもないとのみ教えは、誠に有り難いことと、日々味読させて頂いております。

大本山善光寺大本願法主

鷹司誓玉

台下

法然上人 と 親鸞聖人

【連載十四】

親鸞聖人が捉えた
「浄土三部経」①

林田 康順

(大正大学教授)

『浄土三部経』と『無量寿経』

前号まで五回にわたり、法然上人が終生説き続けられた阿弥陀仏（所帰）・選択本願念仏（去行）・極楽浄土（所求）について簡潔に解説してきました。そして、それらはすべて「浄土三部経」の説示に基づいて展開されたものでした。

親鸞聖人はどうでしょうか。先述したように親鸞聖人を宗祖とする浄土真宗本願寺派も真宗大谷派も、その最高法規たる『浄土真宗本願寺派宗制』や『真宗大谷派宗憲』において「浄土三部経」を正依の經典としていました。もちろん、この点は浄土宗とまったく同じです。しかし、それら二つの法規には、親鸞聖人が、その主著『顕浄土真実教行証文類』（『教行信証』）によって開顕されたのは、他ならぬ『仏説無量寿経』の本義ということだけが記載されており、そこに「浄土三部経」とは記載されていませんでした。なぜ『仏説

無量寿經」とだけあって、「浄土三部經」ではないのでしょうか。その理由を明らかにすることが、法然上人と親鸞聖人の教えの根本的相違を学ぶ最短の道に他なりません。

「浄土三部經」理解の基本

法然上人の弟子であり、真宗の祖となった親鸞聖人は、建永の法難（真宗では「承元の法難」と呼ぶ）によって越後に配流され、その後、常陸での逗留を経て京都に戻り、そこで九十年の生涯を終えています。すでに見てきたように、多くの著作を通じて親鸞聖人は、師法然上人を心から敬慕していたことが知られます。その一方、親鸞聖人は、法然上人と別離の後、『教行信証』や『浄土三經往生文類』をはじめとする多くの著作を撰述して独自の教義を体系化されます。もちろん親鸞聖人にとっては、師の教えを整理・継承することが第一の目的であって、師と異なる教義を打ち立てる意図など毛頭なかったことでしょう。しかし、その著作が説示する内容は、ご自身の思索と宗教体験によってもたらされたもので、決して師と同一ではありませんでした。そんな親鸞聖人独自の教学の中、「浄土三部經」理解を解説する基本となるのが三經差別門と三經一致門です。

三經差別門と三經一致門

まず三經差別門とは、『無量寿經』『觀無量寿經』『阿弥陀經』の「浄土三部經」はそれぞれ異なる内容を説き示しているという見方です。この考え方は「浄土三部經」所説の仏・仏土にも差別を認めるという立場であり、こうした捉え方を顕説といえます。この立場において親鸞聖人は、特に『觀無量寿經』『阿弥陀經』所説の仏・仏土と『無量寿經』所説

の仏・仏土の間にはつきりと一線を画しています。

次に三経一致門とは、前の三経差別門を踏まえながら、『観無量寿経』と『阿弥陀経』の所説は『無量寿経』の教えに導く方便を示したものであって、最終的には『無量寿経』所説の他力念仏往生の教えに連なるとする立場であり、こうした捉え方を穩彰といえます。『教行信証』化身土文類第六において親鸞聖人は、この穩彰の結論を次のようにお示しです。

ここをもつて三経の真実は、選択本願を宗とするなり。(真宗聖典三九二)

(試訳 こうしたことから「浄土三部経」が最終的に説き明かそうとしている真実の教えは、選択本願念仏に帰結します。)

もちろん、法然上人も「浄土三部経」の結論が選択本願念仏であるとする主張に異論を夾むことはされないでしょう。しかし、ここで重要なのは次の点です。つまり、これまで縷々述べてきたように法然上人が、『観無量寿経』や『阿弥陀経』に説かれる仏・仏土を顕説の仏・仏土(方便化身・方便化土)として、『無量寿経』所説の真実の仏・仏土(真仏・真仏土)へと衆生を誘因する方便に過ぎないと指摘されることなど決してありません。ここに法然上人と親鸞聖人による「浄土三部経」理解の決定的相違を見出すことができます。そこでいよいよ今号から、『教行信証』や『浄土三経往生文類』等に基づいて、『観無量寿経』↓『阿弥陀経』↓『無量寿経』の順に親鸞聖人独自の「浄土三部経」理解について解説を施していきます。

『観無量寿経』の説示に基づく往生の位置づけ

まず『観無量寿経』の捉え方について親鸞聖人は、『教行信証』化身土文類第六の標拳の文に次のようにお示しです。

無量寿仏観経の意なり 至心発願の願 邪定聚の機 双樹林下往生。（真宗聖典 三七四）

（試訳 『観無量寿経』の説示内容は次のようにまとめられます。まず衆生が自力の思いで諸行を修めた功德によって浄土往生を遂げることを誓われた（第十九・至心発願の願）について明らかにし、次に阿弥陀仏の本願力を疑って自力の思いで諸行を修めている（邪定聚の機）を説示対象とし、さらに仏の入滅を見ることとなる化土への往生である（双樹林下往生）を述べています。）

このように親鸞聖人は、『観無量寿経』の説示をめぐって、四十八願でいえば第十九願に該当し、その往生人と往生を遂げる有り様についても簡潔に述べられます。

続けて親鸞聖人は『同』化身土文類第六の冒頭に次のようにお示しです。

つつしんで化身土を顕さば、仏は『無量寿仏観経』の説のごとし、真身観の仏これなり。土は『観経』の浄土これなり。また『菩薩処胎経』等の説のごとし、すなはち懈慢界これなり。また『大無量寿経』の説のごとし、すなはち疑城胎宮これなり。（真宗聖典三七五）

（試訳 つつしんで方便の仏と浄土について明らかにするならば、仏は『観無量寿経』の定善十三観の中、第九・真身観に説かれている仏であり、浄土は『観無量寿経』の

定善十三観の中、第三・地想観以下に説かれている浄土であります。またその浄土は『菩薩処胎経』などに説かれる、娑婆世界と極楽浄土の中間にあつて信仰が不完全のまま自力で往生を遂げようとする者が生まれる懈慢界となります。また『大無量寿経』に説かれる、阿弥陀仏の本願力を疑う自力の行者が、あたかも母の胎内に居続けるように、せつかく浄土に生まれても蓮華に包まれて、五百年もの間、仏や聖衆に会えず、法を聞くこともできない疑城胎宮となります。

ここで親鸞聖人は、浄土宗において実に頻繁に読誦している第九・真身観文を含め『観無量寿経』に説示される仏・仏土の内容を方便化身・方便化土と規定されます。

さらに親鸞聖人は、『浄土三経往生文類』の中で次のようにお示しです。

観経往生といふは、修諸功德の願（第十九願）により、至心発願のちかひにいたりて、万善諸行の自善を回向して、浄土を欣慕せしむるなり。しかれば『観無量寿仏観経』には、定善・散善、三福・九品の諸善、あるいは自力の称名念仏を説きて、九品往生をすすめたまへり。これは他力のなかに自力を宗致としたまへり。このゆゑに観経往生と申すは、これみな方便化土の往生なり。これを双樹林下往生と申すなり。（真宗聖典六三〇～六三一）

（試訳 〈観経往生〉とは阿弥陀仏の四十八願の中、〈第十九・修諸功德の願〉において「至心発願」と誓われた要門に入り、さまざまな善根や多くの修行を通じて自ら積んできた功德を回向して浄土往生を願う往生です。そこで『観無量寿経』には、心を静めて修める行である定善や散り乱れる心のままで修める行である散善、世福・戒福・行福という三福や上品上生から下品下生までの九品に説示されるさまざまな善行、あ

るいは自力の思いで称える念仏を説いて、九品のそれぞれに配当される往生が勧められているのです。これは、他力の教えの中にあつて自力を肝要として説かれた教えと言えます。こうしたわけで〈観経往生〉は、いずれも方便の浄土への往生になつてしまい、仏の入滅を見ることになる化土への往生として〈双樹林下往生〉というのです。こうした一連の説示を通じて親鸞聖人は、『観無量寿経』の説示に基づく往生とは、阿弥陀仏の本願力を疑う自力の心をもった者が諸善万行を修める第十九願による往生であつて、その結果として第九・真身観文所説の方便化身が住し、第三・地想観以下所説の方便化身土へ往生することとなると指摘しているのです。

いかがでしょうか。『観無量寿経』の説示内容をめぐつて、師法然上人と弟子親鸞聖人の理解がここまで異なるものかと驚かれたのではないでしょうか。

（続く）

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第八十一回

第二部

ライン

来江の古城遥かなり

さらば、愛しきドイツの女よ③



「学僧」では終わりたくない

前回に引き続き、渡辺海旭とX嬢とのなれそめと別れについて、妄想をたくましくしながら筆を進めるとしよう。

筆者の想像するところ、渡辺海旭が帰国に踏み切れなかった最大の理由は、某ドイツ女性、X嬢との秘められた関係があったからである。そもそも二人の出会い、社会主義者やキリスト教革新派など多様な人々が闊達に語りあう自由思想家団の集まりであり、そこで海旭が開陳した、「大乘仏教の社会宗教としての現代的意義」にX嬢が強い関心を抱いたからであった。

そして、それが二人のなかで「好感」を超えた感情にまで急成長をとげたのは、X嬢の次のことばだった。

「カイキヨク、ここドイツであなたのいう大乘仏教を弘めたらどうかしら。私も協力するから」

その日から二人は頻繁に会うようになった。海旭がX嬢に対して「大乘仏教のレクチャー」を重ねるごとに二人の間の絆は、同志的な色合いを深めながらより強くなっていった。

その背景には、海旭の経済環境の「悪化」があった。すなわち、ロイマン教授から研究の手伝いの依頼もあり、宗門にしばしの留学延長を願い出たところ、すべての「仕送り」を打ち切られた。そこで、畏友の東大教授・姉崎正治の仲介でフランスの富豪カーンに援助を求めたが、これも断わられて、帰国の道はほぼ閉ざされてしまった。そんななかで、海旭の心中に、このままでは異郷の地で骨を埋めるしかないかもしれないという諦めが芽生えつつあったのである。

ただし、それはどこか「消極的」で「捨て鉢」のようなところがあったが、それを積極的なものに変えてくれたのが、X嬢との出会いであった。

そもそも海旭には留学当初から「学僧」であることにどこか逡巡と躊躇があった。ロイマン教授からいくら勧められても博士論文にかかることができなかったのも、そのせいだった。「自分の本懐は、仏の深遠なる教えを書斎にとどめるのではなく、それを悩める衆生に役立てる、社会と共にある僧」でありたい」との思いが留学前から胸中にわだかまりつづけていた。めざすは、導きの師である八宗の泰斗と呼ばれた福田行誠であった。

いっぽうで、なぜ北伝仏教がドイツでは、いや西欧諸国では受け入れられていないのか、留学して以来、ずつと不思議でならなかった。そこへ「だったら、いっしょにドイツで大乘仏教を広めよう」という提案がX嬢からなされたのである。

折しも姉崎正治らから紹介された鈴木大拙がアメリカにあつて『大乘仏教概論』を英語で世に問うて、欧米に仏教を広めることに挑戦していた。ただし、海旭には、大乘の教え

を禅に一面化しているとの不満があった。自分なら、わが法然上人由来の社会宗教としての大乗を欧米人へ深く説くのだが。そんな思いもあつて、「異郷の地で骨を埋めるしかないのかもしれない」という海旭の消極的な気分は、「埋めるだけの価値は十分にある」との積極的な意思へと転換しつつあつた。

女子教育の重要性にめざめる

しかし、海旭とX嬢の結びつきをより強めたのは、「大乘仏教」だけではなかった。海旭にも、X嬢から学ぶものが多々あつたのである。

その一つが「女子教育の社会的意義」であつた。

二人が出会つた年（一九〇八）は、ドイツではじめて女性の大学入学権が制度化され、国内が期待に大いに沸いていた。

ちなみにドイツでは、まだ日本が明治の御一新を遂げる三年も前の一八六五年、「全下

「ドイツ女性協会」が結成され、「女性の手による女子教育」が緒についていた。そして、海旭が留学をはたす一八九〇年代に入ると、「ドイツ女性団体連合」が結成され、百三十七団体、会員七万人もの一大社会勢力となり、教育をめぐる男女格差が問題にされるなかで、ついに高等教育への門戸が等しく女子にも開放されることになったのである。

X嬢こそそのようなドイツ女子教育の賜物であり、自身も女子教育のさらなる充実へ向けての熱心な推進者であった。X嬢との付き合いを深めるにつけ、海旭は近代国家にとって女子教育の近代化は不可欠な要素であることとを、認識させられたのだった。

なお、日本では、明治八年（一八七五）に東京女子師範学校（現・お茶の水女子大）が開校、「女性の手による女子教育」が緒につくが、女子に大学の門戸が開かれるのは、大正二年（一九一三）、ドイツに遅れること五年後のことである。

「カイキヨク、大乘仏教が社会宗教というのなら、あなたは女子教育にも取り組むべきよ」とX嬢にいわれた海旭は、大いに啓発をうけ、まさに発展途上にある女子教育の先進事例をしつかりと見届けたいと思い、X嬢と共に彼の地に踏みとどまる気持ちをさらに強くしたのだった。

*

さて、以上が二人の「なれそめ」だが、これが一気に失意の別離へと急展開する。海旭に、ドイツ駐箚日本大使の珍田捨己から突然の呼び出しがかかり、即時帰国を要請されたからである。どうやらこれには尋常ならざる組織的な背景があり、もはや帰国の「要請」を超えた「命令」に近いと海旭も直感せざるをえなかった。しかし海旭としては易々として肯んじるわけにはいかなかった。もちろんX嬢の存在があったらからだ。そこで、いつも以上に吃音を募らせて、次のように猶予を願ひ出たのである。

「ち、珍田先生、ひ、一月、お時間をください。き、きちんとした答えをもってこちらに伺います」

海旭は、X嬢に直接会って帰国をするか留まるかについて最終的な話し合いをしようとして胸中で決意を固めていた。この時点で、海旭の胸中は「白紙」であった、というよりX嬢の最終的な意思に従うつもりであった。

それでは、海旭の留学生活で最も劇的に思われる瞬間に、時計の針を合わせることにしよう。

大乘仏教西漸のススメ

二人にとって「最後の晩餐」となったのは、くしくも二人のなれそめの場所——自由思想家団の「月例会」がひけた後、「大乘仏教」をめぐる議論をして互いを強く意識することになったレストランであった。その時と同じように、海旭はビールを、X嬢はアルザス名物の白ワインを掲げて乾杯すると、X嬢は

間髪をおかず、海旭の目を覗き込んで、いきなり切り出した。

「カイキョク、あなたはお国に帰るべきよ。お国も宗門もあなたを待っているわ」そこで深く息を吸い込むと、「私は大丈夫だから」と言っただけを一文に結んだ。そこには鉄の意思が表われていた。

海旭の心中に、またまた珍田の「間諜行動」のなせるわざではないかとの疑いがわいた。それを察したかのようにX嬢は固く結ばれていた口元を開いた。

「カイキョク、これは私自身の判断なのよ、誰かから言われたわけではないわ」

X嬢は白ワインを飲み干すと、二人の間の気まずい沈黙を破った。

「なぜあなたが帰国すべきかの理由を述べるわ。一つは、私たち二人にとって最も大切な盟約を果たすのが難しいからよ」

大切な盟約とは「ドイツにおける大乘仏教の広宣流布」である。X嬢の指摘するとおり、

一年ほどたつのに、X嬢以外に「同志」を得ることができないでいた。最近海旭の中にも、この先いくら努力をしても難しいのではないかとの疑念がわいていた。

「むしろ、カイキヨクが日本に帰って、日本からヨーロッパへ向かつて大乘の教えを広めるほうが合理的ではないかしら。私はそれをこの地で待っているから」

すなわち、「大乘仏教西漸のススメ」である。時計の針を先送りすると、X嬢の「方針転換」は実はあたっていたといえるだろう。

海旭は帰国後の大正四年に、「外人の仏教新婦依」と題して、イギリス人のガービーが鎌倉は円覚寺の前管長・宗演を師として得度したことにふれ、「大教のためまことに慶すべし」とした上で、次のように記している。「欧州基督教民にして仏教僧侶となりしもの尠^{すく}からず、英国仏教会の中堅として活動しつつ、ある歓喜慈（アーメンダメツテヤ）大比丘は、英国の教養ある紳士なりき。聖典の

翻訳に、著作に、講演に、欧人に多大な感化を与えつつある智灯（ニヤーナチロカ）比丘は独逸の学究なりき、此等欧人の比丘は其数今漸く増加し、英京ロンドンに於いては新たに仏教会館^な就りて比丘の礼拝止住の僧堂を造り、伊端（イタリア）の境ルガノ湖畔には僧伽藍建立せられて修道安禪の淨侶あるを見る。而も此等の比丘は悉く錫蘭（セイロン、現スリランカ）、若しくは緬甸（ビルマ、現ミャンマー）に於いて得度受戒したる僧伽にして南伝小乗律の人たるに過ぎず、大乘戒に依り大乘の教に帰して大比丘となりしは、実に吾宗覺比丘を開祖とす。

宗覺比丘の得度は所謂仏教西漸の決して一場の夢想にあらざるを確証するものとして実に喜ぶべし。而して之と共に日本仏教徒の自覺をして一層強大ならしむるは実に刻下の急務ならずんばあらず。特に精修密行、実地の力量を増大するに力（つと）め以て大教西漸の萌芽をして涼蔭四布の大菩提樹たらしむる

に奮勉せざるべからず」（『靈月全集』下巻二二〇頁）

この海旭の言説の裏を返せば、ヨーロッパでの「大乘仏教の広宣流布」は一向に進んでいないことを認めた上で、「日本から西漸を図らねばならない」と提言しているわけで、X嬢が勧める「方針転換」の正しきの証明でもあった。

最後の晩餐と永遠の別離

さらにもう一つX嬢の口から出た「帰国のススメ」に、海旭は大いに驚かされた。それは皮肉なことに、X嬢と共に彼の地に留まる決意をした理由である女子教育だったからだ。

「カイキヨク、日本にとって、あなたの宗門、さらには仏教界にとって、火急の課題は女子教育の近代化と充実よ。それができるのは、それをドイツで学んだあなたしかいないわ」
実はX嬢から啓発をうけたドイツの女子教育の充実ぶりを知るほどに、海旭の胸中に日

本でも女子教育の近代化を手掛けなければならないとの思いが内心に募ってきた。留学前もそうであったが、キリスト教、とくにプロテスタント系が日本における女子教育の先鞭をつけたことあり、仏教系は大きく立ち遅れていたことも海旭には大いなる懸念であった。なお海旭は、帰国すると、淑徳大学・高校・中学の前身である大乘女子学院（大正十三年）、巣鴨家政女子学校（大正十四年）、巣鴨女子商業（昭和六年）の開校に深くかわかり、それぞれの院長と校長に就任、日本の女子教育に貢献するが、X嬢の「帰国のススメ」を受けていなかったら、どうなっていただろうか。

X嬢から提案された「帰国のススメ」は終始一貫して理づめで、いかにもドイツインテリ女性の典型のX嬢らしかった。しかし、碧眼の奥には深い悲しみが潜んでおり、あえて「理」と「知」で「最後の晩餐」を乗り越えようとする彼女の強い決意のほどがうかがえ

た。X嬢の性格からしてそれを翻意させることは不可能に思われた。

それまで聞き役に徹していた海旭は、身を乗り出すと、おもむろに口を開いた。

「僕に帰国を勧めるのは、君の僕に対する深い思いからであることは、よくわかる。それに従うことにしよう。それが僕の君に対する思いでもあるからだ」海旭はそこで深く息を吸い込んでから続けた。「故国に戻ったら、必ずや君からの負託、『大乘仏教の西漸』と『女子教育の充実』を図ることを約束する。その上で、もう一つ約束を加えたい。それは、帰国をしたら、近代化のなかで落ちこぼれた貧しい人々を救済する事業をおこす。これも、ここドイツで、社会主義者や宗教家たちの実践から学んだものだが、それが現代における大乘の教えの実践であり、仏教が社会宗教であることの具現化だと思うからだ」

海旭の胸中には、先日ベルリンで珍田大使から聞かされた、昨年末に神戸の貧民窟で救

済活動を始めたキリスト者の賀川豊彦という「まだ見ぬ将来のライバル」のことが浮んでいた。

二人はしばらく押し黙ったまま「最後の晚餐」を静かに終えると、ついに永遠の別離の時がやってきた。X嬢は残りの白ワインを干すと、海旭に別れの乾杯を促した。しかし、海旭はビールのジョッキを脇にのけると、返した。

「本日をもって一切の酒は断つことにする。君との約束を果たすための証として」

海旭は、その足で寄宿先のアパートに戻ると、同部屋の日本人医学生にいきなり剃刀を渡し、自慢のリーゼントを剃り上げるよう頼んで、大いに驚かせた。海旭はつるりと頭を撫でて剃り具合を確かめると、明日朝一番のベルリン行の列車で珍田大使に帰国の決意を伝えるための支度にかかった。

(つづく)

こころじつぽう
響流十方

われとはげみて念仏申して、いそぎ極樂へまいりて、五通三明を
さとりて、六道四生の衆生を利益し、父母師長の生所をたづねて、
心のままに迎えとらんとするべきにて候なり。
(法然上人『往生淨土用心』)

自らお念仏に励んで、死後は早く極樂淨土へ往生して五通や三明といった超人
的な力を体得して、六道四生という迷いの世界に生きる者たちにお念仏の教えを
弘め、両親やお世話になった方々の生まれかわったところを訪ねて、思うがまま
にお淨土にお迎えしようと思うべきです。

還相回向―かけがえのない大切な方のもとへ還り来て―

自坊では、今年も十名ほどの新盆供養をお勤めしました。八十年代、九十年代の方がほとんどでしたが、まだお若い方もいらつしやいました。

お一人は、昨年の初夏、わずか十四歳で旅立ったN・Yさんです。空手道場に通い、人一倍稽古に励んでいたYさんでしたが、突然の病に冒されての急逝でした。明るいYさんの突然の訃報を受け、葬儀会場は多くの友人や道場の仲間達、先生方の長い列が続いていました。四十九日法要に合わせて納骨を済ませた後、Yさんのお墓参りに足繁く通われているご両親から、茶帯だったYさんに空手道場から黒帯が贈呈されたと伺いました。

もうお一人は、今年の一月に四十六歳で旅立ったH・Mさんです。野球好きだったMさんは、今から十四年前、三十二歳の時に脳梗塞で倒れて植物状態になってしまいました。Mさんには二人のお子さんがいらつしやって、Mさんが倒れた時、娘さんは小学校一年生、息子さんは四歳だったそうです。Mさんは一月中旬に息を引き取られたので、娘さんの成人式は乗り越えたものの、息子さんの大学受験には間に合わなかったそうです。成人式を見届けて旅だった娘さんに対し、お父さんとの思い出が少ない息子さんは「亡くなる時もお姉ちゃんに差をつけられてしまいました」と私に語ってくれました。一方、Mさんの

奥様は植物状態だった旦那さんの身体をすみずみまでマッサージしてあげながら、二人のお子さんの日々の成長を語りかけるのが日課だったそうです。わずかですが、Mさんが喜んでくれるような反応があり、自分も不思議な力を与えられたそうです。Mさんが喜んでくれるマッサージを活かそうと一念発起した奥様は、専門学校に通って鍼灸師の資格を取得、就職して家計を支え続け、今は独立して開業されるまでになりました。

お盆は、先立たれたご先祖さまが、この娑婆世界に遣した家族のもとを訪れて、家族の近況報告を聞きながら共に過ごす期間です。自坊のある地域では、はじめにお浄土から還って来る方が迷わないようにと、ご自身のお骨が眠るお墓を木枠で囲み、白提灯を上から吊して明るく照らします。かつての賑わいこそなくなりましたが、新盆のお墓には今も親戚や友人が集い、亡き方を偲びつつ、亡き方と共に大切な時間を過ごしています。

こうしたお盆の行事について法然上人は直接言及されませんでした。ただお浄土からこの娑婆世界に還って来て、すべての人々に向けて救済活動に努める還相回向については様々にお示しです。冒頭のご法語もその一つです。

ここで法然上人は、「六道四生の衆生を利益し」とおっしゃりつつ、「父母師

長の生所をたづねて」と述べられます。つまり、あなたのお父さんやお母さん、お世話になった方々の所へ還っても構わないよ、とお示しになるのです。

なるほど、重い病気を患い、事件や事故に巻き込まれるなどして、幼くして命を終えてしまったお子さんは「お父さんやお母さんはいったいどうしているだろう、自分がいなくなつて寂しくて、悲しくて、辛くて、泣いてばかりいるのではないだろうか」と、ご両親が心配でいてもたつてもいられないことでしょう。法然上人は、こうしたお子さんが抱くであろう思いを汲み取つて、「ご両親のもとに還つても構わないよ」と優しく説き示して下さいたのです。

その逆に、小さなお子さんを遺して旅立つてしまったご両親であれば、「わが子はどうしているだろう」と気が気でならないことでしょう。法然上人は、そうしたご両親が抱くであろう切なる願いをしつかりと受けとめて、「どうぞお子さんのもとにお還り下さい」と優しく語りかけて下さることでしょう。

十四歳で旅立つたYさんは慈しみ深くお育ていただいた最愛のご両親のもとに、四十六歳で旅立つたMさんは寂しい思いをさせ続けたお二人のお子さんと十四年間にわたつてマッサージを施し続けてくれた愛しい奥様のもとへと、まっさきにお戻りになられたことでしよう。

合掌（林田康順）

江戸の川
を歩く

第十五回

江戸ウォーカー

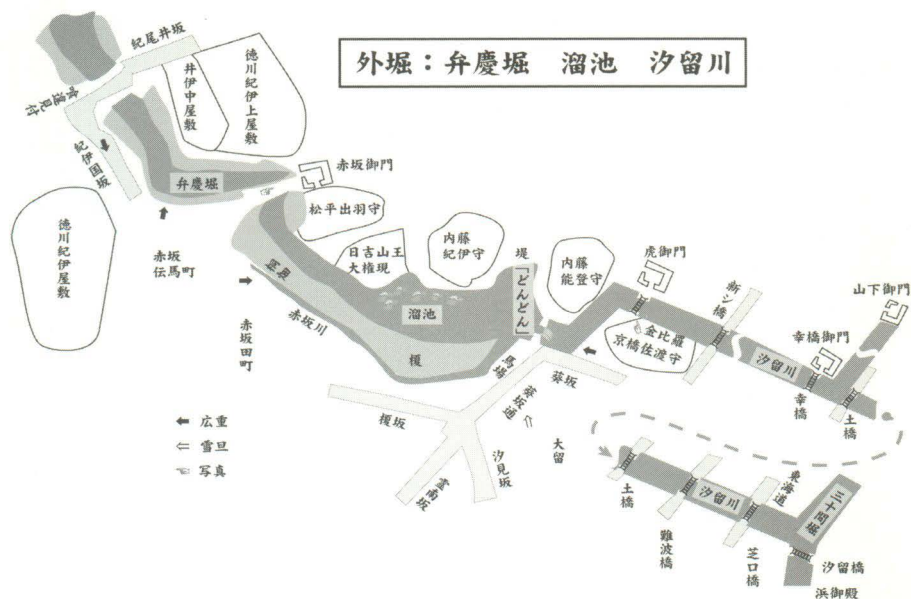
森清鑑

外濠・溜池から汐留川

神田川流れの外濠は紀尾井坂下の食い違い見付で終わる。ここから赤坂御門までの御堀（赤坂堀）は、井伊や紀伊の湧水池からの流れ、近在の鮫川などの流れを利用してできている。その掘削工事は寛永年間（一六二四～一六四四）で、江戸城の各所の建設工事に携わった弁慶小左衛門という大工頭が、縄張り（設計）したという。それでこの御堀を弁慶堀と呼ぶようになった。清水坂と赤坂町を繋ぐ弁慶橋は、江戸時代にはなく、明治二十二年、神田岩本町藍染川に架かっていた弁慶橋（弁慶小左衛門作）を解体し、新たに造られたもの。この橋によって、紀尾井町と赤坂町が直接結ばれ便利になった。

江戸時代、堀の右手には紀伊国坂が赤坂に向かって下り（坂の右、南側は全て徳川紀伊の居屋敷。赤坂御所、堀の北側は井伊家の中屋敷（ホテルニューオータニ）。広重は弁慶堀を幾つも描いているが一つは紀伊国坂から対岸に広がる井伊家の中屋敷を、もう一つは、逆に紀伊国坂を登ってくる大名行列を描く。この

外堀：弁慶堀 溜池 汐留川



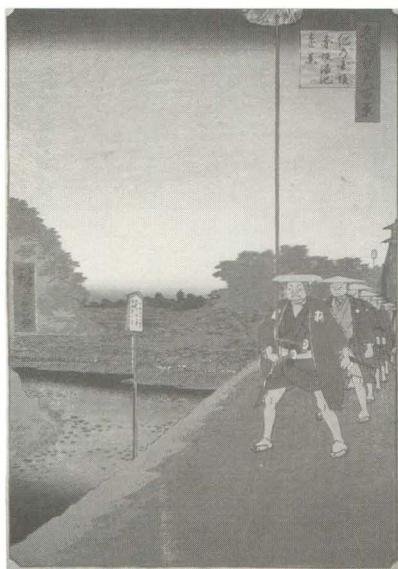
絵の左が弁慶堀でその先には赤坂の家々が密集している。そして市ヶ谷御門から牛込御門までと、この弁慶堀だけが現在も痕跡を留めている。

赤坂御門

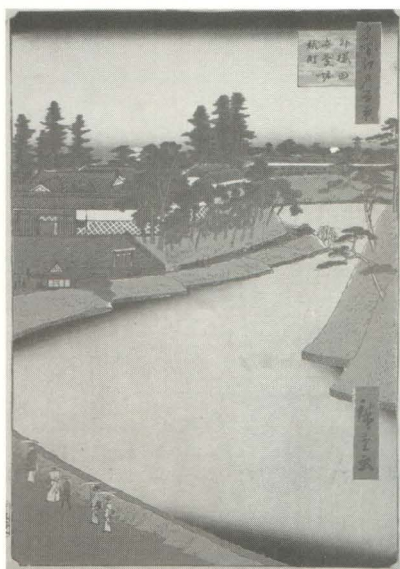
弁慶堀を下ると、そこはもう赤坂伝馬町の家並み。そして弁慶堀の東端に赤坂御門が控えている。赤坂御門の参道は広く、堀を遮断している。典型的な枡形御門で、ここが重要な軍事拠点であることを示し、構えは堅牢。御門の北側には、紀伊の上屋敷、南側は松平出羽の上屋敷が囲み、守備体制は完璧。

溜池

そして赤坂御門からの堀が溜池である。今はかけらも残っていないが（外堀通り）、家康が江戸に入府したときには、すでに存在していた天然の大地。池の各所から水が湧き出、そこに鮫川、櫻川、赤坂川といった小川が流れ込んできた天然の湧水池である。その水は清冽で、一六五四年玉川上水ができるまで、飲料水として使われていたのである。



◆広重：紀伊国坂：右、紀伊家大名行列。左、弁慶堀、前方、赤坂の町並み

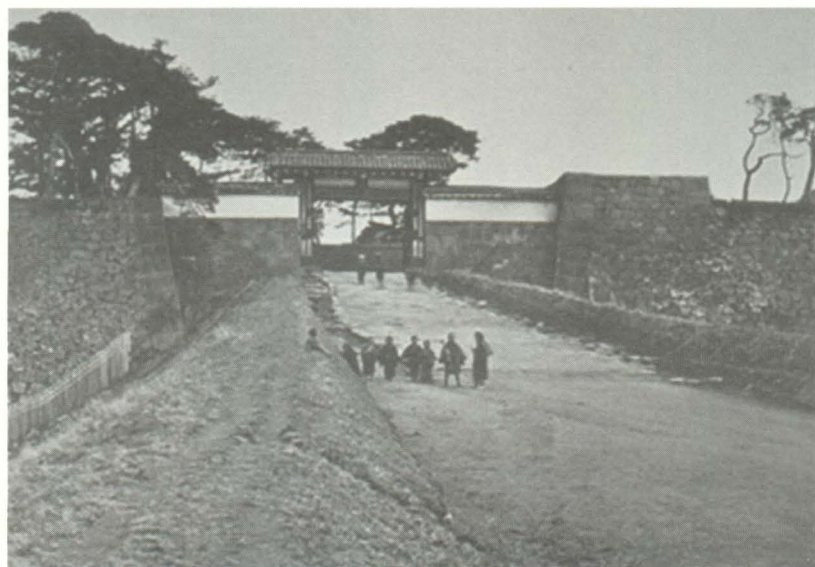


◆広重：外桜田弁慶堀祇町：対岸に見える屋敷は井伊家中屋敷

この天然の池を外濠として整備する。工事は慶長十一年（一六〇六）着工。責任者は和歌山藩主浅野幸長。彼は、虎ノ門側に堰を設け、池幅を広げ、池の南側の土手を広げ整備し、植林する。桐の木が乱立。通称、桐畑といわれるほど。桐の木は成長が早く、その根は地盤を強固にする。広重は、この桐にスポットを当て、溜池の光景を描く。非常に美しい景観。江戸っ子の観光スポット。

溜池の北側は、迫り上がった山王台地。松江藩松平出羽守上屋敷、岡部岸和田藩の上屋敷。そして日吉山王権現の偉容が広がっている（江戸三大祭りの拠点）。見た目にも非常に美しい景観を造り上げる。

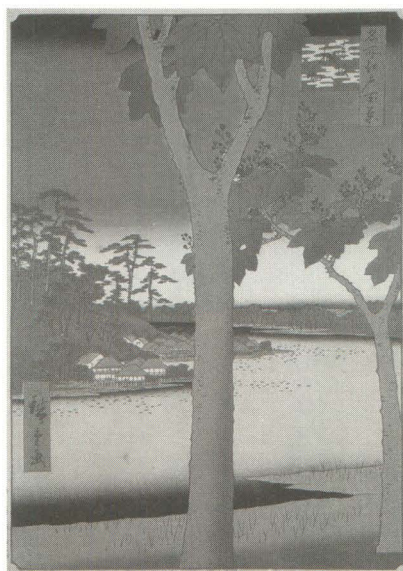
日吉権現を過ぎると、池はさらに広がりを見せ、水面には蓮の花が咲き乱れている。そして東端の延岡藩内藤能登守の上屋敷のところに堰が設けられる。両側から堅牢な石垣が迫り出し、中央部から溜池の余水が滝のように流れ落ちている。溜池をダムのように堰き止め、ここから虎御門に向かう外濠の水勢を強めている（特許庁東南角）。原理は、神田川関口河口堰、船河原橋の堰と同じ。流れ落ちる水音が辺りに響き渡る。



◆赤坂御門写真

そこで処の人々は「どんどん」と称す。広重は「虎ノ門外あおい坂」でどんどの夜景を見事に描いている。月夜に青白く光った水が勢い良く流れ落ちている。堰の左、登る坂は葵坂。坂上に辻番所が見え、そこで葵を栽培していたので葵坂（虎ノ門病院北側）。二八そばの屋台。金比羅大権現の長提灯を持つ二人。すぐ側にある丸亀藩京極佐渡の守上屋敷には金比羅が祭つてある。身を清め、ここに「日参（ひまいり）寒行。堰の右上に見られる明かりの灯った屋敷は、内藤能登守上屋敷。もう一つ広重は「どんどん」の昼間の光景を描いており、この堰の石垣の様子がよく分かる。

葵坂を登り切り、辻番屋を左に。これが葵坂通りで雪旦は、ここから広大な溜池を描く。小さな大名行列、町民が行き交う。池沿いにはずらりと茶店が並んでいる。通りの突き当たりは、池沿いに榎木坂。南に汐見坂と霊南坂。池側の平たい堤には、馬場や大的稽古場。溜池の水管理を受け持つ水番屋もある。馬場側は大溜。赤坂川が流れ込み溜めになっている。土壌固めのために浅野幸長は、ここには、榎木を沢山植える。それを見下ろすから榎木坂。

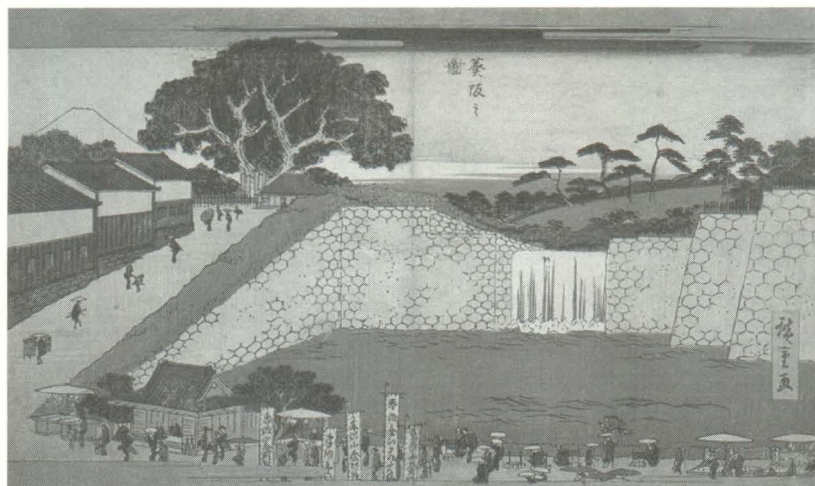


◆広重：溜池、桐畑

汐留川、外濠

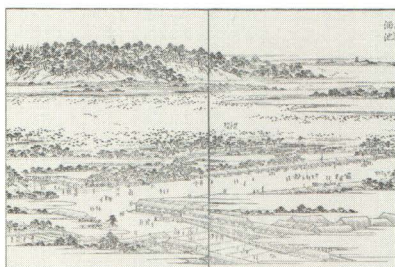
虎ノ門「どんどん」から流れ落ちた水は汐留川外濠を形成する。この堰から、堀の左右は高い石垣に囲まれる。すぐ虎御門に出る（文部科学省前）。赤坂門と同じ堅牢な枡形御門。注目すべきは、堀に架かる御門参道は石垣造りで、中央から水が滝となつて下つていくことである。溜池の「どんどん」に続いて堰となり一段低く設計。この先、堀は江戸湾、大川の入江、浜離宮に流れ込む。そのため、満潮時海水の逆流を阻止する必要がある。ここからこの堀川を汐留川と呼ぶようになる。

虎御門の次が新シ橋である（新橋の語源）。これも堅牢な石垣の橋。この橋のたもとから南に下る小川が櫻川（増上寺堀を巡って古川に注ぐ）。そして幸橋。溜池の「どんどん」から、ここまで左右はほとんど大名屋敷で固められている。橋の左側一角には幸橋枡形御門が聳えている。そしてここに一石橋、鍛冶橋から来る日本橋川流れの外濠が注ぐ。この堀の北側にある山下御門は、堀に迫り出して在り、狭い水路が設けら

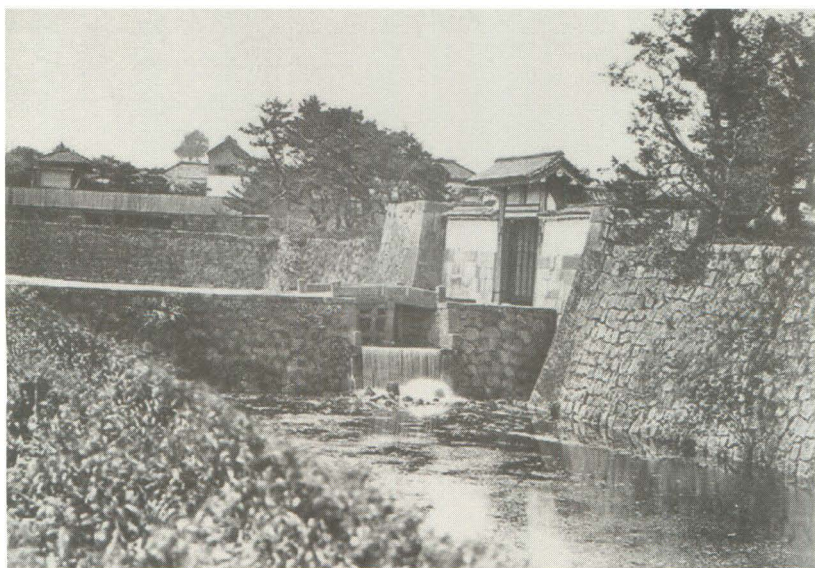


◆広重：葵坂の図：正面が「どんどん」左葵坂。どんどんの背後に溜池がある。

れている。これも堰状で、潮の逆流を防ぐ処置。幸橋の次が土橋。橋の上に土が被せてあり、一見すると道である。次が難波橋。そして東海道に架かる芝口橋。ここに北側から来る三十間堀が合流。そこに架かる橋が汐留橋。ここには潮の逆流を直接受けるところだけに堰が設けられていたに相違ない。そして汐留川は浜御殿（旧浜離宮庭園）の北側を舐めて、江戸湾に注ぐのである。溜池も汐留川も道路と化し、今は全く痕跡もない。



◆雪旦：溜池俯瞰：江戸名所図会：中央溜池、上、山王台地、池のやや下、中央、菱坂通り。左下手前が汐見坂、池側が堰坂。



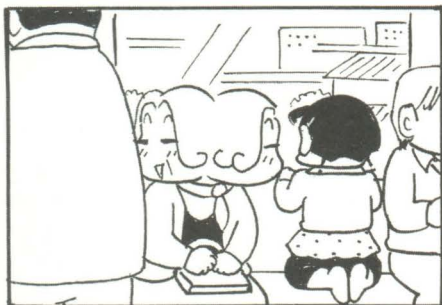
◆虎御門写真

144

かい目

さっちゃんね

かまちよしろう



浄土誌上句会

●知

〔特選〕日傘して知らない街の角曲がる 工藤 掉

むかし「遠くにいきたい」という歌があつた。

「知らない街を歩いてみたい」というのである。

そういう願望はよくわかる。どこか知らない遠

い街。日傘をさして街角を曲るだけで、また何

かひとつ予想できない未来が開ける気分。

〔佳作〕ジャズ・バーの晩夏や無知の涙の書

小林 亜紀

芒種なり路地に旧知の大鴉

高取 英吾

初鰹土佐の高知の海の色

斉田 仁

●事

〔特選〕はつなつや紅あはあはと法事菓子 土岐 藍彦

法事に菓子はつきものである。誰かが用意

してくれている。初夏に似合うような和菓子

なのであろう。その淡い紅色だけを詠んだの

である。静かにお茶をのみながら親戚同士の

近況など報告しあう時間が見えてくる。

選者＝無縫庵烏鷺坊

〈佳作〉木下闇神事を終えし馬休む

鳥羽 梓

昼顔の揺れ白昼の絵空事

内藤 隼人

事故処理のチヨーク残して徹雨かな

長谷 邦雄

●自由題

〈特選〉

風鈴の鳴つてほのかに暗い部屋

水谷真衣子

夕方なのであろう。陽は落ちたが、まだ点

灯には早い。ほのかに暗い部屋の静謐な空間

だけが目の前にある。窓辺に風が揺れてふと

風鈴が鳴る。その音色が空間を気づかせるの

である。夏の句だが涼しい。

〈佳作〉六月の凶器のやうな紳士靴

蒲生有希菜

模様替えすれば涼風知恵袋

飯島 流英

仔猫との別れ悲しや半夏生

飯島 英徳

締切・二〇一七年十二月二十五日 発表・『浄土』二〇一八年新年号

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内月刊『浄土』誌上句会係

浄土誌上句会のお知らせ
兼題
黒目
自由題

編集後記

運動会整列ばかりに目立つ笹 岱潤

「徳本上人」をご存じだろうか。江戸時代末期の浄土宗捨世派の行者で、とにかくすごい人である。十六歳の時に食事を麦の粉と豆の粉だけとし、横になって寝ることをやめた人で、それを六十一歳で亡くなるときまで貫いた。

三十日間の不断念仏や、百日間の断食行などを行い、谷での修行では礼拝行を岩の上で毎日五千から一万遍行つたと言われている。全国行脚ではさまざまな奇瑞を起こし、蓮の花を咲かすなどは当たり前で、病氣治しや害虫駆除、雨乞いや巨石を浮かすなどを行い、噂は広がり、

徳本上人の人氣は高まるばかりで、寺で説法をすれば二万人の人が詰めかけた。石に刻まれた名号碑は、北は北海道から南は九州まで全国に存在し、その数千五百を優に超えるという。声も身の丈も大きく、その風貌は周囲を圧倒したのかもれない。

最後はお釈迦さまも法然上人も横になって死んだとして、やっと横になり、上人のために初めて出来たお堂、小石川の一行院で息を引き取ったと言われている。それが一八一八年十月六日。つまり本年がちょうど二百回忌である。

しかしこうした方を唯々持ち上げていいのだろうか、行に徹する方は確かにす

ごいけれど、浄土教の本質とは違うはずだ。確かにこうした行者、奇瑞を起こす上人をスーパーヒーローにしてしまう時代があった。しかしこれからは宗教の本質を伝える冷静な目が重んじられていいはずだ。
(長)

編集チーフ 長谷川岱潤
編集スタッフ 斎藤晃道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

雑誌『浄土』 特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
加藤昌康(下北沢・森巖寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
桑原勇慈(甲府・瑞泉寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光園寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭典(大阪・一心寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
松濤泰彦(芝・寶松院)
真野龍海(大本山清浄華院)
水科善隆(長野・寛慶寺)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp/>
メールアドレス hounen@jodo.ne.jp

浄土 八十二巻十月号 頒価六百円
年費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十九年九月二十日
発行 平成二十九年十月一日

発行人 佐藤良純
編集人 大室了皓
印刷所 株式会社 晚印刷

〒一〇五・〇〇一一
東京都港区愛宕公園四七四明照会館四階

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三三七八)六九四七
FAX 〇三(三三七八)七〇三六
振替 〇〇・八〇・八・八二八七

写経と写詠歌セットのご案内

特徴① 奉書の手本に筆ペンで直接なぞる

特徴② 法事や行事の待ち時間で写せるA4判

特徴③ 手本は当会オリジナル

特徴④ 「写経セット」は浄土宗日常勤行式。

特徴⑤ 「写詠歌セット」は宗歌と四季の和歌。



従来の写経と異なる薄墨をなぞる写経と写詠歌のセットです。扱いやすいA4版で筆ペンで写せます。手軽にかつ短時間でできる新しいタイプの写経、写詠歌ですが、高級奉書を使用していますので、墨と毛筆でも写せます。法事や各種行事、詠唱会の待ち時間に、朝夕のお参りの前後に、新たな写経・写詠歌行事にご利用下さい。

申込日 年 月 日

御名前 電話 ()

御住所 〒

《御寺院欄》 教区 組 寺・院 寺院番号

①写経セット 領価:12,000円(税込) 関東・関西 セット
(1組12枚、10組入り) ※寺院名 () を入れる・入れない

※関東版(三奉請)、関西版(四奉請)に丸をおつけ下さい。

②写詠歌セット 定価:10,000円(税込) セット
(1組5枚、20組入り)

※写経セットの寺院名入れは無料です。ご希望の場合は寺院名をお書き下さい。
※消費税と送料は領価に含んでいます。商品お届け時の請求書にてお支払い下さい。
※ご注文をいただいてからお届けまで3週間ほどかかりますので、ご了承下さい。
※1組からご注文ご希望の方はFAXにて当会にご相談下さい。

《本頁をコピーの上、注文を記入して、法然上人鑽仰会へ
Fax (03-3578-7036)、メール (hounen@jodo.ne.jp)、または
郵送(〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館4階)下さい》

檀信徒の皆様へ

写経 セット

浄土宗勤行の解説も付いた12枚組

浄土宗の日常勤行式が
写経になった!! 写経後は
オリジナルの経本
にもなります。

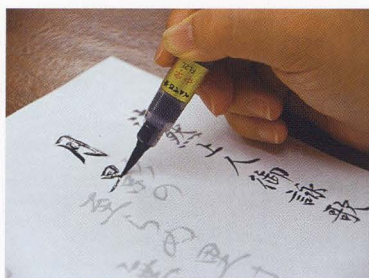


薄墨手本をなぞる
オリジナルA4判

詠唱会
の皆様へ

写詠歌 セット

宗歌「月かげ」と春夏秋冬の和歌
解説付き5首セット



詠唱でお唱えする歌、
法然上人のお歌を
筆で写して心に刻もう!

当会オリジナル新商品!!

法然上人を心から慕う
法然上人鑽仰会だから
こそ作れる高級奉書の
オリジナル手本です。

法然上人鑽仰会 FAX : 03-3578-7036

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4明照会館4階

※お問い合わせは、Fax またはメール

hounen@jodo.ne.jp へお願いします。